氏　　名	髙橋　珠州彦
学 位 の 種 類	博士（　文　学　）
学 位 記 番 号	博　乙　第　　２９０６　　号
学位授与年月日	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	近現代関東における観光地形成と地域住民

主　　査	筑波大学　教　授	文学博士	小口　千明
副　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	中西　僚太郎
副　　査	筑波大学　教　授	博士（文学）	伊藤　純郎
副　　査	筑波大学　准教授	博士（文学）	湯澤　規子

論　文　の　要　旨

本論文は、近現代の関東における観光地の形成過程を地域住民の主体的な関わりと価値意識の観点から明らかにしたものである。本論文の特徴は、観光資源の立地過程や開発資本の動向ばかりではなく、地域住民による転業の動機や観光資源とみなされるものへの価値観変化といった点から観光地の形成過程を解明しようしたことにある。本論文は序論と結論を含む全6章で構成される。

第1章「序論」では、近現代における観光地形成を扱った従来の研究が鉄道系企業に代表される開発資本の影響に注目してきたことを述べる。さらに地域変化を扱った研究では、1990 年代以降地域住民の役割に関心が向けられながらも観光地の形成に対する地域住民の関与が十分に検証されてきたとはいえないことを指摘する。そのうえで本論文では、新しい価値意識に基づいて多くの観光地が形成される近現代において地域住民が観光地形成にいかなる関与をしたのか明らかにすると述べる。研究対象地として取り上げる銚子、川越、吉祥寺の 3 事例地域は、鉄道や公園といった近代的諸施設の出現が地域特性の変化に影響を与えたという共通点をもつ。

第2章「地域住民の行動と銚子の観光地化」では、とくに日本で最初の洋式灯台の一つとして 1869 年に犬吠埼灯台が建設された以降の犬吠埼付近における観光地化と地域住民の関わりを検討する。著者は灯台建設以前の銚子観光は、文人墨客が残した作品の分析から町場の寺社と磯浜を巡ることであったと指摘し、犬吠埼付近も海岸景観の名所として紹介されるのみであったと述べる。犬吠埼灯台が出現すると、犬吠埼には銚子の人々により灯台見物客を相手とした茶店が出された。この茶店が明治後期には潮湯治客向け旅館へと発展したことや、皇族の別荘が建設されたことから、犬吠埼付近は銚子観光で訪れるべき場所へと変化したと指摘する。また銚子駅から犬吠埼方面に向け、醤油醸造業者など資本家の出資を受けて観光鉄道が敷設された。この鉄道に出資した大口資本家らは景気動向により短期間のうちに撤退したが、地域住民らが共同出資により新たな鉄道を再興させたと指摘する。銚子の事例では灯台を近代の象徴と捉えた見物客の来訪と、地域住民が観

光客の輸送手段を維持しようとしたことで観光地化が進展したと述べる。

第 3 章「地域住民による町並み保存活動と観光地川越の形成」では、蔵造りの町並み景観が観光資源とみなされ「小江戸」と形容される川越を取り上げる。ここでは明治期から存在し続ける町並みに新たな価値が付与される経緯や観光資源とみなされる過程を検討する。古い町並みが注目を集める契機として 1970 年代の国鉄による「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンがあげられるが、この時期の川越は観光地としてみられることはなく、むしろ住宅地として開発が進む一方であった。蔵造りの町並みは宅地需要の高まりと商店街の相対的な地位低下により分断されつつあったが、商業の活性化により町並みを維持しようとする住民団体「蔵の会」の結成以降その価値が再認識され、1999 年に文化庁選定の重要伝統的建造物群保存地区となったと指摘する。

第 4 章「吉祥寺における地域住民の生業転換と都市観光地化」では、近郊農村から都市観光地へと変貌した吉祥寺を取り上げ、地域住民による生業活動の変遷や道路拡幅事業前後における商業地の変化、井の頭恩賜公園の開園に対する地域住民の対応を検討する。地域住民の転業過程を分析した結果から、親類や従前の職業を通じて入手される情報が新たな業種へ移行する際の判断材料として重視されたと指摘し、道路拡幅事業前後における沿道住民の行動を分析した結果からは、拡幅後の土地や家屋の所有や貸借関係は拡幅以前の関係に影響を受けたものであったと考察する。また、吉祥寺地域に隣接する井の頭池付近が東京市の公園として開園した際、吉祥寺の商店主らは桜の献木や茶店経営などを東京市に出願し、公園に賑わいを演出する役割を果たしたと述べる。井の頭公園の来園者増加は吉祥寺駅周辺の商店街を利用する人々の増加に結び付き、吉祥寺は多くの来訪者を受け入れることになった。吉祥寺の事例では、観光地化の過程において旧来の地域住民は新たな商店経営者進出の受け皿となったほか、近隣に開設された公園に行楽地としての賑わいを加えることで観光資源化し、吉祥寺への来訪者増加に貢献したことを指摘する。

第 5 章「関東における新たな観光地の出現と地域住民」では、観光地の形成過程における地域住民の役割について、3 事例に共通する地域変化の特徴を検討する。著者は事例地域に共通する特徴として、観光地の形成過程と地域住民の関係に 3 つの段階が存在することを指摘する。最初の段階である素地形成期は後に観光資源として位置付けられる諸施設の立地や景観の形成が行われる段階であり、第 2 の段階は地域住民が経済的な動機に基づいて活動する段階、第 3 の段階は地域住民が地域内外の要因により事業の衰退や生業の維持困難に直面することで、地域活性化や観光地化に関わる行動をとる段階である。さらにこの各段階の移行過程を検討し、観光目的ではない諸施設や景観が後に観光資源として評価され観光地化する過程では、地域住民による価値意識の転換が不可欠であったと述べる。

第 6 章「結論」では、以上の検討を総括する。1 点目に観光地の形成過程を地域住民の側面から検討する場合、地域住民は地域での定住を前提にしていることを考慮する必要があると指摘する。鉄道系企業など観光開発資本は、自社の利益を第一義とし経済状況を判断材料に事業の遂行や撤退などを判断するのに対し、地域住民はそれまでの経営方法が困難な状況に陥った場合にも容易に撤退することはなく、新たな諸施設に対する価値意識を転換することで事業を継続し地域の観光化を導いたと述べる。2 点目として地域住民が観光地化を推進する段階において、生業活動の継続に対する危機意識が存在していたことを指摘する。大手資本による観光地開発とは異なり、地域住民は商業環境の変化に伴う事業継続の困難に対し、その危機的状況を打開する策として観光地化につながる公益的な行動をとったと指摘する。以上を通して著者は、大手資本などによらず観光地化した地域を検討することで、地域住民が観光地形成の端緒を自らもたらすことや生業維持に対する困難や危機感を背景として開発資本などに代替する役割があったと主張する。

審　査　の　要　旨

１　批評

本論文は、近代以降の観光地形成過程において地域住民が周辺の状況や大手開発資本によって決定付けられていく地域的特質の変容を甘受するばかりではなく、自らの生業や生活を持続させるために主体的に観光地化を推進する役割を果たしたことに着目した意欲的な作品である。近代以降の観光地形成を扱った既往研究が、鉄道系企業など観光開発資本による開発行為と地域住民の対応行動に注目してきたことに対し、本論文は観光開発資本が介在することなく観光地化した地域を事例に、生活史の聞き取り調査を援用し地域住民による価値意識の転換にまで言及した優れた研究成果である。企業の利益を優先させて状況判断を行う観光開発資本に対し、生業や生活を維持するため容易に撤退や移転ができない地域住民が、価値意識の転換により当該地域の観光地化を導く過程を具体的かつ詳細に描いた本論文は、観光地の形成過程を解明した歴史地理学の研究成果として高く評価できる。なかでも、生業として事業を継続しようとする地域住民が、生業維持に対する危機回避の行動として観光地形成に主体的に関わっていくとした指摘は卓見である。

しかしながら、本論文は観光地の形成過程における地域住民の役割を観光開発資本に対比させようとするあまり地域住民を一括して捉えた感があり、地域住民がもつ多様性に踏み込んだ検討が行われていないという点で課題を残す。地域住民の視座から観光地形成を検討する際には、居住期間の長短や地域社会との関わり方などを踏まえた検討が望まれる。本論文は一部に課題を残すものの、近代以降の観光地形成研究において緻密な実証研究に基づき、地域住民の主体的な役割を価値意識に踏み込んで明らかにした功績は大きい。本論文は、近現代における観光地の形成研究に新たな知見を提示した成果として、学界に寄与するところが大であると評価できる。

２　最終試験

平成 31 年 1 月 22 日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条（3）に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

３　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。